

## 乳幼児期の遊びの研究

——特に三歳未満児の遊びについて——

和多 美知子



### 一 はじめに

昭和二十六年に保育の道にたずさわった頃は、保育園といつても、五歳児組、四歳児組に重点がおかれ、きちんとした横割保育形態が保たれていたが、その当時、三歳児以下の年齢は、いわゆる混合保育形態が展開されていた。そして、その頃は三歳児以下の年齢についての文献は殆んどみたらないうような状態の中で、手さぐり保育が開始されていた。それは全く五歳児、四歳児の保育を下にうすめた形態に他ならなかった。子どもの発達は母体にいる時から——集団の場では○歳児から出発すべきではなからうか？ 今までのように、うすめられた保育形態でよいのであろうか？

という疑問点に先天性肺結核という子どもを保育するにあたって強く反省させられることになった。三歳児以下に対する保育形態および内容とは一体何なのか？ 一人一人の子どもの実態の中でみつめていたいという願いからこの研究は始まった。けれどもこの試みは今から思えば全く逆コースを辿って来たことになる。資料の豊富な五歳児、四歳児のカリキュラムをもとに、三歳児への挑戦を試みた。あらゆる分野にわたっての子どもの実態把握に取り組みたいと思い、自分なりに試みて五年、次は二歳児、その次は一歳半まで、そして一歳児までというような取り組み方をしてきた。その結果、一、二歳児までの解体保育と一部年齢別中心保育を交えた保育形態による子どもの素晴らしい伸びと生きた目を見ることができた。このように子どもの実態を見つめてくると、

大人の常識が子どもの伸びようとする芽をゆがめている点がかかりあるのではなからうか？ という思わぬ数々の疑問点にぶつかってしまった。

排尿でいえば、オシメのはずれる時期、食事と言えば何故スプーンを年少児に使用させているのだろうか？ スプーンとはしとどう違うのか？ という疑問、又最初のスプーンの持ち方が、のちのちのはしの持ち方にまで影響しているのではなからうか？

ということに対する実例からくる疑問、歩行についても、密度化された中で本当に歩行が全般的におそくなっているのだろうか？ 又「一歳六か月をすぎても歩けないようであれば、一応知的発達遅滞を考える」とかいてある本もあるが、実態はどうなのであるうか？ ○、一、二歳児に適した生活環境とは何なのか？ 子どもの遊具やあそびについても今まで考えられていたようなもので本当に子どもが満足しているのでしょうか？ 等、数々の疑問にぶつかり、一つ一つの事態の中から、この疑問に挑戦して見ることになった。このような段階をふみながら昭和四十八年度から○歳児に取り組んでみるようになった。○、一、二歳児が友達とのかかわりあいの中で、あそびを通してどのように「心情」「技能」「生活習慣」を身につけていくかということについて、四年間の記録をもとに研究解明してみることにした。この度は○歳児と一、

二歳児とのかかわりについてのべる。

## 二 研究の動機

昭和四十八年度三歳未満児入園児三十名 そのうち、生後四か月以上の○歳児十二名、一歳児十名、二歳児八名を迎え、年齢別に一応組わけをしてみた。そして○歳児は、一、二歳児より壁をへだてた部屋にベッドを並べて保育を開始したが、この○歳児が、空腹、睡眠、排泄、痛みなどの外因的なもののみでなく、よく泣くという状態が繰り返され、担任保育がいろいろと玩具を与えたり、抱いたり試みたが、瞬間泣きやめることはあっても、余り効果が期待できなかった。しかもよく観察してみると、壁をへだてた向こうにいる一、二歳児の活発な活動の時、いわゆる年長児の声のよくきこえる時に泣き声が多くきかれることに気づいた。そこで思い切って、一、二歳児の中に○歳児を入れて保育してみることにした。すると今までの泣き声は消え、年長児の動きに目を輝かせ、見入ったり、動作にあわせて手を叩いたり、体を前後、左右に動かしたりしての笑顔と語りかけが多くみられたし、一、二歳児も○歳児に対して、とてもいたわり、可愛がるという現象がみられた。リズムあそびや体育あそびの時も歩けな

ったり、よちよち歩きの○歳児を上手にかわしながら、そして時々語りかけながらの活発な動きを見せる一、二歳児の姿がみられた。そこには自分たちは、「お姉さん」「お兄さん」だという誇りさえみられ、先生の負担も半減した。このことから今までのベッドをたたみ、部屋の改装を試みた。壁面は透明のガラス戸にし、今まで一、二歳児だけの解体保育と一部年齢別中心保育を交えた保育形態を○歳児も交えた解体体へと変化させてみた。この○歳児も含めた解体保育と一部中心保育を交えた保育形態は、昭和四十八年度から始まり、四十九年、五十年、五十一年と五十二年度の現在も続いている。

### 三 研究方法

四年間の個人記録を詳細に記入し、同時に八ミリによる○歳児と一、二歳児とのかかわりあいの中でのあそびを追跡撮影した。

### 四 結果および反省

解体保育を通して、○歳児と一、二歳児のふれあいが深まり、今までの大人とのふれあい以上に目の動きと輝きが増し、子ども

同志でなければ聞かれない感動ある発語がとびだし、模倣がさかんで、活発な活動を展開しようとする意欲が見られると共に、自分でしようとし、あらゆるものにふれ、そしてためす等の外界に対する探索活動がさかんになり、生活習慣の基礎づくりが促進され、あそびが大きく展開されてきたことにより大きな効果をみた。一例をあげると、基礎的習慣づけを必要とする「食べる」ことにしても、自分でコップやお皿をもとうとし、スプーンやはしにふれたり、握って口にもっていきこうとし、手づかみでも自分で食べることを喜ぶようになる。又一歳児は大人や年長児がはしを使っているのを見ていたためか、スプーンよりもはしの方に興味を示し、正しい持ち方、食べ方さえ指導すれば、スプーンもはしも余り食べることに大差はみられないという結果をみた。このことから当園では一歳児前半から、はしを使用している。「排泄」も年長児を見て便器を嫌がらないようになり、支えられて首のすわった四か月児はオマルででき、オシメがはずれパンツになった軽々しさの中で、お尻のただれもなく、次の動きへと進んでいく。この場合、便器の形、大きさ、高さ、便器の数、便所のあり方などが大きく排泄に関係してくる。この改善が三歳未満児を受持つ担任保育の労力の減少にも大きくつながってきた。又手を洗おうとし、ハンカチやおしぼりで顔や手を拭こうとするな

ど、あそびではすべり台や階段をのぼろうとしたり、年長児が高いところからとぶのを見て声をたてて笑い、手を叩き、自分もとびたくて手をさしだし、支えてもらってとびおけると満足するような笑顔をうかべたり、はさみで紙を切ろうとしたり、又のりづけあそびでは、のりの中に手をつっこみ、ぬたくり、手についたのりを不思議そうに眺めたり、クレヨン、絵筆でのなぐりがきを楽しんだり、吹く、とぶ、走る、前転する、ぶらさがる、歩く、投げなど体全体の運動を通して、年長児とのかかわりの中で喜んで〇歳児が這ったり、歩いたりしながら、目でみ、耳できき、手でさわるなど、たしかめながら素晴らしい生き生きとした目の動きと行動力がみられた。

ここで歩行についての調査結果から、思わぬことに直面した一例を紹介したい。一園で毎年〇歳児が歩行を開始していく状態をしらべていく中に、一つの疑問にぶつかった。そこで他園の状態も知りたくて十園程にお願ひして同じようにチェックしていただき、この現象が一園だけの傾向なのかどうか？ をたしかめる資料とした。

- 一、その結果同じ傾向が十園でも見られた。
- 一、歩行開始は密度化されていても案外に早いということ。
- 二、歩行開始期が一歳五か月をすぎてからの子どもには何等か

の問題が含まれてはいたが、このパーセンテージは僅かだった。

三、以上にもまして大切な問題として浮かびあがってきたのは、歩行開始日から殆んど這わなくなった日までの日数が、二十六日以上五十六日までを要した子ども二十四名（調査人数百四名中に）顕著に問題行動がみられたということである。

その要因として、身体欠陥によるもの一六・六%、栄養失調八・四%、過保護によるもの七五%という結果を得た。歩行開始期よりも、歩行開始日から、いわゆる一歩歩き始めた時から這わなくなった日、すなわち転んでもすぐ立ってよちよち歩くという状態になるまでの「この日数」の方が問題行動児との関連が明らかになるか？ ということが驚ろきを得た。

このような観察の中でも年長児とのかかわりを多くもった〇歳児は、年長児の作品に手をだし、こわしたり持ち歩いてじゃまをしたりというような、あらゆる面での探索行動が動きの面でも活発化し、目でみつめ、追いかけて、耳をすまし、手でいじくり思考するという媒介過程を経て、精神発達が促されていると考えられる。その一例として、ディズニーのバズル積木（七個の木片で構成）が入園当初二歳すぎても中々組み立てられないが、〇歳児から年長児の組み立てをじゃまし、年長児とのかかわりの中で豊富な感覚刺激をうけた子どもは、一歳六か月でさっさと組立て、み

んなを驚ろかせた。このような現象はあらゆる面ではしばしば見られる。一、二歳児も○歳児に対して「つかまえ鬼」一つをとってみても、心にくいばかりの配慮が展開されていく。二歳児は一歳児、○歳児をつかまえるのをためらい、可愛そうだという表現をしながらいたわって、一つのつかまえ鬼としてのルールを保とうとする姿は、大人の概念ではちょっと考えられない場面が展開される。体を通しての二歳児と、○、一歳児とのかかわりの中での

この経験こそが、情操教育を身につけていく大切なことではないだろうか。  
一部年齢別中心保育と解体保育等での足がための中で、今後○歳児を出発点としての年長児への見なおしを試みていきたい。この度は○歳児と一、二歳児の解体が「心情」「技能」「習慣」に大きな効果をみたことについての発表にとどめた。

(岡山・なかよし保育園)

〈児童園芸学〉

秋の宝石——いろいろな実——

皆川 美恵子

北原白秋が作詞した童謡に「赤い鳥小鳥」というのがあります。

白い鳥、小鳥、  
なぜなぜ白い。

白い実を食べた。

赤い鳥、小鳥、  
なぜなぜ赤い。  
赤い実を食べた。

青い鳥、小鳥、  
なぜなぜ青い。  
青い実を食べた。

いつも歌を口ずさむ、歌好きな子どもでもなかった私ですが、短くて簡単なこの歌の歌詞とメロディーはすぐ覚え、知らないうちに歌っていました。そして、赤い鳥や白い鳥や青い鳥のほかにも、黒い鳥、黄色い鳥、橙々色だいたの鳥、桃色の鳥、茶色の鳥